

## 八代海のアサリ復活へ

— 囲い網でホームラン —

鏡町漁業協同組合  
内川 明紀

### 1. 地域の概要

熊本市の南約 40 km に位置し、八代海に面する八代市（やつしろし）は、総面積約 681 km<sup>2</sup>、人口は約 12 万人の熊本県下第 2 の都市である（図 1）。山・川・海そして広大な平野と多様で豊かな自然に恵まれ、農林水産業や工業が盛んである。特に農業分野では、トマトや晩白柚、い草の産地として知られている。

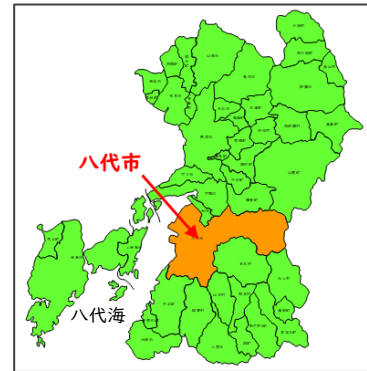


図 1 位置図

### 2. 漁業の概要

鏡町漁業協同組合の組合員数は 325 名となっている。主な漁業は、採貝漁業、小型定置網漁業などがある。主な漁獲物は、アサリ、コノシロ、ガザミ、ヒラメ、マガキなど。近年ではカキ養殖が定着し、「鏡オイスター」としてブランド化したカキを扱うカキ小屋が冬の風物詩となっている。

### 3. 研究グループの組織と運営

八代市鏡町地先の干潟の維持・回復及びアサリ・ハマグリなどの保護・育成などを図るため、平成 29 年 8 月に「鏡町漁協アサリ生産部会」を立ち上げた（図 2）。漁協内の 3 地区（鏡、横江、港区）の漁業者が所属し、令和 7 年 4 月現在、54 名が所属している。



図 2 鏡町漁協アサリ生産部会

毎年度、当該部会の総会において、予算や決算、事業計画、採貝期間などを話し合い、アサリ資源の回復に向けて様々な取り組みを行っている。

### 4. 研究・実践活動の取組課題選定の動機

かつて、当組合におけるアサリの漁獲量は約 660 トン（平成 20 年）を誇り、アサリ採貝漁業は当組合の漁業の中心であった。しかし、平成 23 年 6 月に大雨災害が発生、翌年の平成 24 年 7 月にも九州北部豪雨が発生した。これらの影響でアサリ資源は壊滅的な被害を受け、平成 24 年以降のアサリの水揚げが無くなり、資源が回復しない状況が続いた（図 3）。

アサリ資源の回復を図ろうと、組合員総出で干潟の耕うん、母貝移植、食害生物の除去、網袋による稚貝の着底促進に取り組んだが、漁獲にはなかなか繋がらず、アサリ資源回復の取り組みは「空振り」が続いた。

そこで、平成 29 年に「鏡町漁協アサリ生産部会」を立ち上げたが、本部会の発足当初は、3 地区（鏡、横江、港区）がそれぞれに作業を行っていたため、取り組みの効率が悪かった。また、クロダイやエイ、鳥類によるアサリの食害が深刻な状況となり、食害対策を急ぐ必要があった。そこで、地区ごとに行っていた作業を全地区共同で行うとともに、より効率的で効果的なアサリの保護対策を検討し、八代海のアサリ資源回復を目指すこととした。

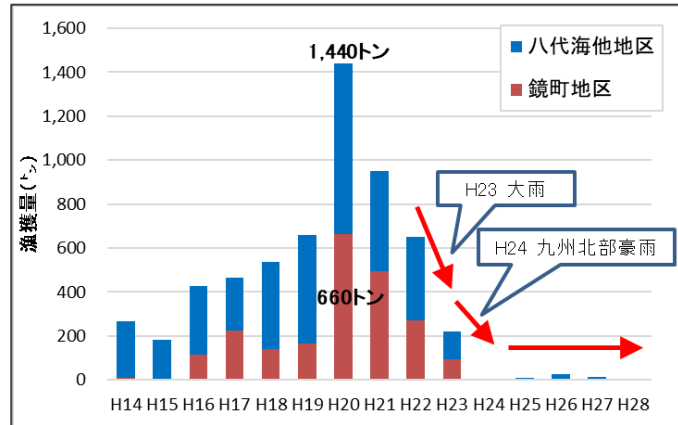


図3 八代海のアサリ漁獲量の推移

## 5. 研究・実践活動の状況及び成果

### (1) 「被覆網」の展開

まず、平成 27 年 12 月、アサリの稚貝が多かった「港区」において、組合員自ら「被覆網」による稚貝の保護試験を 1 か月間行った (図 4)。被覆網は幅が 4m、長さは 50m におよび、目合は 9mm である。試験の結果、被覆網のない対照区のアサリ稚貝の密度が 12 個/㎡であったのに対し、被覆網ありの試験区では 268 個/㎡と、保護効果が高いことがわかった (図 5)。このことから、本部会で 4m×50m の網を 100 枚並べ、合計 2 万㎡に及ぶ被覆網の大規模展開を行った。この被覆網の展開が「タイムリーヒット」となり、平成 30 年に 45 トンのアサリの漁獲につながった。



図4 被覆網による保護試験の状況

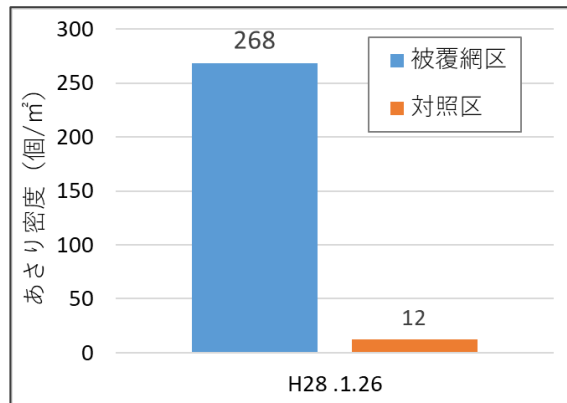


図5 被覆網による保護試験の結果

### (2) 「囲い網」の展開

しかし、被覆網についての課題も出てきた。被覆網自体への付着物が多くなると、

持ち上げられないほど重くなり、維持管理が非常に大変で、特に夏場の暑い中の作業には苦勞した。また、食害生物が被覆網自体に穴を開け、食害を受けてしまうという事象が発生した。これらのことから、アサリ生産部会で会合を開き、もっと効率よく管理できる方法はないかと、新たな策を考えた。

そこで、既存の被覆網の近くに、管理が楽になると思われた「囲い網」を50m×100mの広さで設置し、試験を行うことにした(図6)。令和3年9月からの1年間の試験を行い、A：囲い網試験区の中、B：既存の被覆網の下、C：対照区のアサリの密度を調べると、A：1,300個/m<sup>2</sup>、B：2,000個/m<sup>2</sup>、C：0個/m<sup>2</sup>と、被覆網の下には劣るが、囲い網の中には十分アサリが定着することがわかった(図7)。

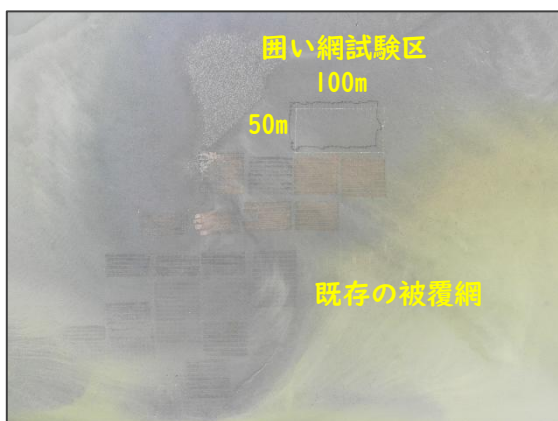


図6 囲い網試験区と既存の被覆網  
(R3.9.9 ドローン撮影)

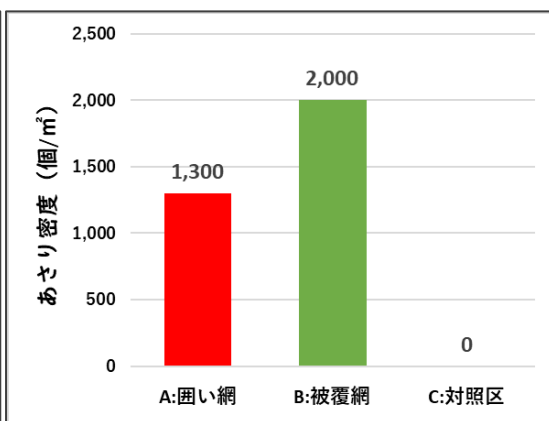


図7 アサリの密度 (R4.9.7 調査)

この結果を受けて、本部会では令和4年10月から囲い網の大規模展開を行った。部会員が船の上から支柱を立て、囲い網を張り、囲い網の下から生物の侵入を防ぐため土のうで固定した。こうしてチーム全員の見事な連携プレイにより、令和5年6月に周囲の総延長1,500mに及ぶ「本漁場」と呼ばれる囲い網漁場が完成した(図8,9)。網の高さは約3m、網の目合は約9cmとなっている。

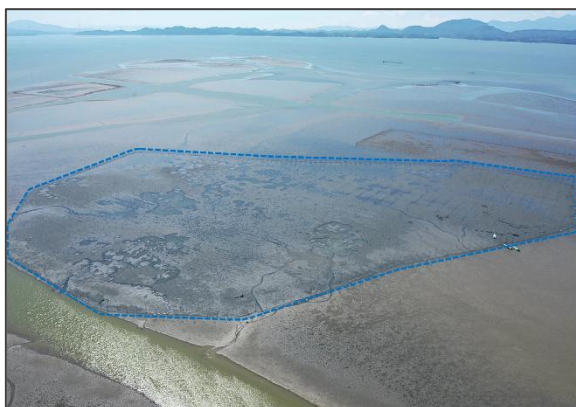


図8 本漁場囲い網 (点線枠)



図9 本漁場囲い網の外観

網には流木や枝葉が掛かることもあり、それらの回収や傷んでしまった網や杭の補修なども、全員で行った。

囲い網が常にあることで、クロダイやエイなどの食害生物の侵入を防ぐことができ、被覆網を併用することで、冬場に飛来する鳥からの食害を防ぐことができたと考えている。令和5年6月の調査では、この漁場内で3,250個/㎡のアサリが育った。

### (3) アサリ漁獲量の回復

囲い網漁場内のアサリが順調に育ち、令和6年には鏡町漁協でのアサリの漁獲量が95トンに達した(図10)。漁港は賑わいを見せ、1日に3トン以上のアサリが水揚げされる日もあった(図11)。囲い網の取り組みは「ホームラン」となり、漁獲量としては13年ぶりの高水準となった。

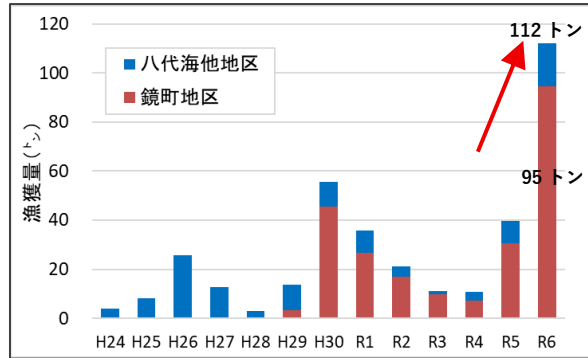


図10 八代海のアサリ漁獲量の推移

囲い網と被覆網の設置にかかった資材コストを比べると、同じ2万㎡の設置では、囲い網が被覆網の約3分の1で済んだ(図12)。また、囲い網と被覆網の設置やメンテナンスにかかった作業時間を比べると、囲い網が被覆網よりも30%ほど少なかった(図13)。このように、被覆網よりも囲い網の方が、コストも時間も効率的であることがわかった。



図11 大量のアサリで賑わう漁港(R6.6)

ただし、実際には囲い網と被覆網を併用しているため、付着物や埋没により作業が大変になる被覆網の作業時間を減らし、いかに多くアサリを増やすことができるかが今後の課題である。

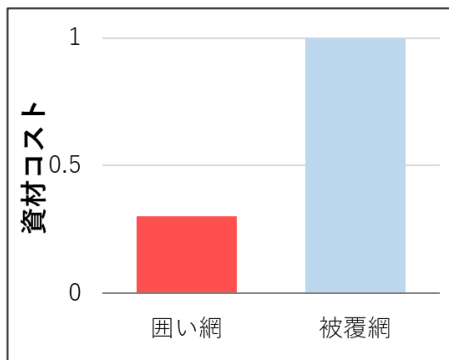


図12 資材コストの比較  
※2万㎡設置  
※被覆網を1とした場合

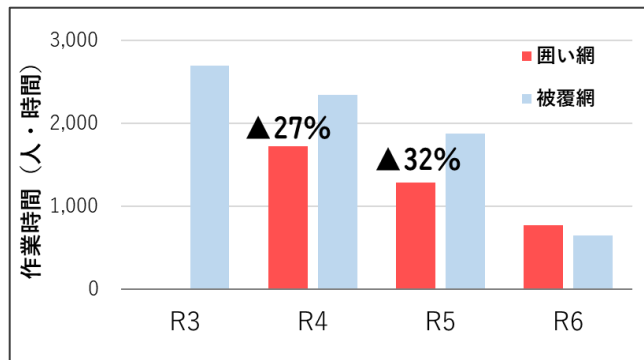


図13 設置・メンテナンスにかかった作業時間の推移

## 6. 波及効果

アサリ資源が回復したことで、漁協として地元のお祭りに出店して、地元消費者に八代海のアサリをPRすることができた。また、長年休止していたアサリ漁場の一般開放潮干狩りも大盛況となっている。開放する前日には、海の生き物に慣れ親しんでもらおうと、地元の保育園児を招待し、潮干狩り体験会を行っている。

囲い網の中では、アサリ以外の生物も増えてきている。巣穴に筆を入れて釣るアナジャコは、単価も高く、漁業者の貴重な収入源になっている。また、これまで見られなかったような特大のハマグリも育っている。



図 14 地元の祭りでアサリの販売と PR

## 7. 今後の課題や計画と問題点

今後は、囲い網と被覆網の「二刀流」について、効果的・効率的なスケジュールを確立していきたい。①春は囲い網と被覆網により、魚や鳥からの食害を防ぎながら、稚貝の着底を促進する。②鳥がいなくなる夏場には、付着物がひどくなる前に被覆網を取り払い、囲い網のみで食害対策を行う。③寒くなり鳥が飛来する前には、被覆網を設置し、食害に備える。これらにより守られたアサリは、成長の良い大きなアサリから早めに漁獲し、高密度によるへい死を避けていきたい。

この囲い網と被覆網を併用するスケジュールを確立するために、令和6年9月には「ヒラト漁場」、令和7年5月には「新漁場（仮）」と、新たな囲い網漁場を2か所に設置しており、更なるアサリ資源の増大を目指していきたい。

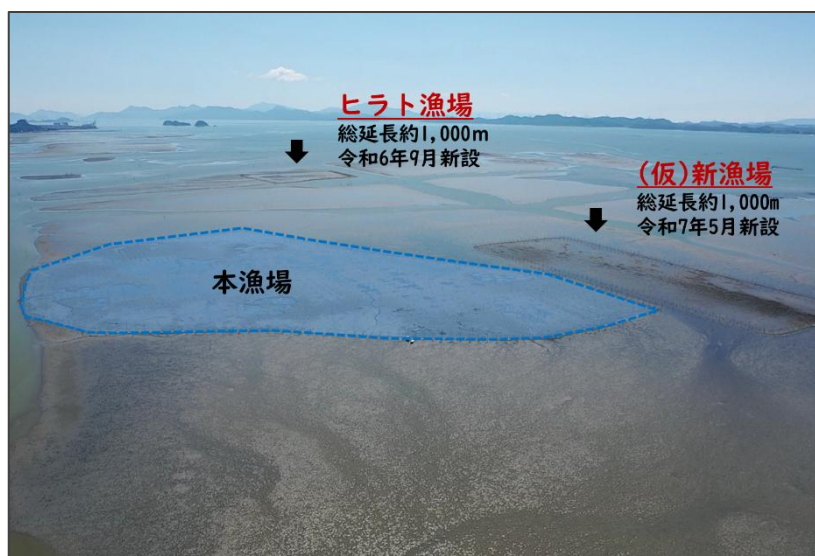


図 15 新たに設置した2つの囲い網漁場